

## 解答

□

- 1 効〔く〕 2 至難 3 均整（均齊） 4 待望 5 保障〔く〕  
6 ちょうほう 7 ぎょうそう 8 もんこ 9 ちすい 10 と

□

- 1 あお 2 こけ 3 もち 4 おう 5 しま 6 さお

□

- 1・5・8・9

□

問一 ミキちゃんを悪く言ったお母さんを許せず、しゃべる気になれなかったから。

問二 イ 問三 ウ 問四 エ 問五 イ

問六 大雪の日に寄り道をし、先生の言いつけも守らずに、お母さんに心配をかけ、怪我をさせてしまった罪悪感。

問七 〔お父さんが〕宇佐子もい〔～〕うになった〔と感ずること。〕

問八 雪のために、お母さんと宇佐子の間の緊張の糸を切ってくれるお父さんは帰ってこない。しかし、そのことで、宇佐子が「沈黙」という手段に気づき、お母さんと互角に対抗できるようになったということ。

□

問一 ウ 問二 約束事 問三 ウ 問四 ウ・エ

問五 ありのままの世界は光や動きや色の連続体であり、認識しようもないものだということ。

問六 すべてがつながって混在するありのままの世界に、切れ目を入れ、約束事やパターンをあてはめ、理解可能なものに置きかえること。

問七 ア ○ イ ○ ウ × エ ×

## 解答

□

問一・二 いつもなら「飲んでもいい」と聞くはずなのに、宇佐子は「ちょっとむくれた顔」で、しかも「そっぽを向いたまま」、何も言わずにミルクを飲んでいきます。たまたまに、「そんなに棘のある顔をしなくてもいいじゃない」というお母さんの心を察している宇佐子ですが、「それでも宇佐子はミキちゃんの悪口を言ったお母さんとはしゃべる気がしなかった」のです。ミキちゃんの悪口を言ったお母さんへの反抗からだんまりを決め込む宇佐子ですが、この時点では、話す糸口を与えれば宇佐子が対抗して口を開くと考えたのでしょう。

問三・四 「沈黙の刺は時には饒舌な刺よりもずっと鋭い攻撃の武器になる」とあります。「宇佐子はそのことのこの雪の晩、少しだけ気がついた」のですが、攻撃されている側の「お母さんのほうはもっと早くからちくちくやられていて、たまらなかった～宇佐子のかたくなな沈黙に突つかれると痛くはないはずの足首がじんじんしてくるのだ」と、「沈黙」の攻撃を身にしみて感じています。

問五 「日陰の雪」とは、「宇佐子が鋭い棘のある沈黙を手にした夜、一晩中降り続いた雪」が残ったものですから、「宇佐子が鋭い棘のある沈黙」や、この「沈黙」による、宇佐子とお母さんとの冷たく張りつめた関係を象徴しています。これが、「夜が訪れるたびに凍りついて、頑固な固まりになった」というのですから、宇佐子が「鋭い棘のある沈黙」を武器に、お母さんへの対抗を続け、ますます関係がこじれてしまい、容易には溶けないわだかまりができてしまったのです。

問六 「松葉杖」は、「お母さんの足首」の怪我を象徴しています。「お母さんが心配するぐらいのことは想像でき」るのに、「学校が早く終わったというのに、まっすぐに家に帰ってこなかった」り、「ミキちゃんの家に行く～寄り道はいけないこと」だとわかっていてしたこと、「木村先生から～待っていてと言われたのに帰ってきてしまう」軽率さ……。 「宇佐子が悪いことばかり」だという自覚があり、お母さんに心配を掛けて、怪我をさせてしまったことに、罪悪感を感じているのです。

問七 小学校五年生の宇佐子には、自我が目覚めつつあります。大切な友だちの「ミキちゃん」を、よく知りもしないで「悪く言った」お母さんを絶対に許すことができずにいるのです。今までだったら、少しばかりの怒りがあっても「お母さんに話したいと思った」のをこらえられずに、なんとなく関係が元に戻っていたのですが、今回は、「沈

黙」を「鋭い攻撃の武器」として、自分から折れずにお母さんに対抗しているのです。これを、お父さんが、「冷静で客観的」に判断するのであれば、宇佐子の成長と見て、「宇佐子もいよいよ～これは愉快だ」と感じることでしょう。

問八 「贈り物」とは、直後の「鋭い棘のある沈黙」のことですね。大雪をきっかけに始まった、宇佐子とお母さんの冷戦ですが、仲介したり、うやむやにしたりしてくれるはずの「お父さんは雪で会社に閉じこめられ」帰ってきません。しかし、その冷戦の中でこそ、お母さんとの対抗手段である「沈黙」に宇佐子は気づくという、大人への一歩を踏んだのです。

#### ㊦

問一・二 「人は、自分たちの**約束事**の中にあるものしか見えない」ので、村人にとって「生活の**文法**で理解できるものであった」唯一のもの、ニワトリだけが「印象に残った」＝“見えた”のです。

問三 直後の「それは逆のパターンを考えればわかる」以下、形式段落ないでをの理由を説明しています。「いま生きるうえ」では、「餌がほしいとき、赤い点をつつく」という最低限の行動が取ればよいので、「全体として見る」という手間を省くのです。

問四 「テーブル」「花びん」「壁」「絵」は、「ありのままの世界」から、ある「約束事」に基づいて切り取られた“一部”ですね。

問五 患者は、視覚情報を意味づけする「約束事やパターン」を知らない状態、すなわち、「ありのままの世界」を目に映しています。しかし、「ありのままの世界とは、どこにも切れ目も境界もない連続体」であり、「認識しようもない」のです。

問六 最後の形式段落に「見るとは送られてきた信号を脳が意味づけることである。」とあり、これに続けて具体的な説明になっていますので、ここを使ってまとめるとよいでしょう。

問七 ウ・エ「ありのままの世界を、見ることはできない」とあります。